

ロシア海軍将校の報告書にみる「日本および一九世紀後半から二〇世紀前半の日露関係」

——ロシア国立海軍文書館所蔵の史料より——

M・E・マレヴィンスカヤ

尊敬する研究者の皆さん！

二〇〇〇年三月、ここ東京大学史料編纂所において行われたシンポジウムで、私たちはサントペテルブルグのロシア国立海軍文書館に所蔵されている日露関係史に関する史料の全体について報告致しました。その際私たちが皆さんに指摘しましたことは、ロシア艦隊ならびに個々の艦長の艦長が上層部、特に海軍元帥、海軍大臣、各方面の海軍司令官に提出した報告書、および海軍の諜報担当（武官）の報告の中になりに多くの貴重な情報が含まれているということでした。僅か一行の必要な情報、艦船の技術状態、天候、砲撃などに関する他の詳細な情報の中に紛れ込んでいる場合が多いため、これらの史料を扱う作業は簡単ではないことは特に強調したいと思います。前回二〇〇〇年のシンポジウムにおいて、日露関係史の中で、私たちが今携わっているテーマに関し研究者の仕事がやりやすいようにするために、海軍文書館所蔵の史料を調査し、別々のフォンドにあるロシア海軍将校の報告書を見つけ出し整理する作業を始めることになりましたが、この企画に、直接日本のみならず、東アジア地域全体、正確に言えば中国、朝鮮および日本の三方国に関係する史料も含めることが決まりました。しかしながら作業に入

った段階で、報告書のみ限定するのではなく、これらの国についての言及がある史料は目録に載せることになりました。現在までに相当な量の作業が進み、その結果の一部を皆さんにお見せすることができるようになったということです。

今回の報告では二種のフォンド、すなわち、個人のフォンドと太平洋地域艦隊のフォンドについて考察したいと思います。

個人のフォンドを重要度に応じて選び出すことは主観的になるおそれがあるので、単に文書番号の順に従って見ていくことにします。

フォンド9は「ドゥバソフ・フォードル・ヴァシーリエヴィツ海軍大将」のもので、まず初めに、ドゥバソフ提督の極東での勤務についてお話し致します。ドゥバソフ提督は一八八八年から一九〇一年まで一貫してフリゲート艦スヴェトラナ号とヴラジーミル・モノマフ号、随伴船ビョートル・ペリーキイ号を指揮しました。一九〇一年から一九〇七年にかけて太平洋艦隊副司令官を、一九〇七年から一九〇一年までは司令官を務めました。極めて自然なことですが、彼の個人フォンドには、事実上年代をすべて艦隊司令官の職にあった一九〇八年に特定できる報告書が保存されています。この史料に含まれている情報は非常に多様で

ある上、時には一、二行で表されているにもかかわらず、その背後に政治的に重要な意味を持つ出来事が示唆されている場合がしばしばあるのです。例えば、一八九八年にアレクサンドル・ミハイロヴィッチ大公の日本訪問が実現しましたが、幾つかの報告書の中にこの問題に関係した部分があります。一例を挙げると、七月九日に大公が神戸から汽車で京都に向かったこと、京都に五日間滞在し日本の古都の名所旧跡を見物したことが述べられています。直属の上司に宛てた報告書には、ゲンリツ

と皇太子の横浜訪問が実現しなかったこととその原因が日本政府の拒否によるものであったことも記されています。一八九八年一二月の報告書で、ドウバソフは皇帝ニコライ二世の「名の日」の祝いに長崎港務局長が来訪したことを報じていますが、これに関しドウバソフは「ここ最近日本政府が我々に対して非常な警戒心を見せていることを指摘しないわけにはいかない」と特記しています。一方、九月付けの報告書を見ると、ヨーロッパ人に対する日本住民の悪意のある、ところによっては敵意に満ちたとさえいえる態度が言及され、同時に、日本政府関係者が配慮を示していること、政府が和平的気運に向かっている良い兆しがみられること、砲艦オトヴァーヌイ号の艦長と士官二名が「オオトリ」祭に招待されたことが述べられています。また、一八九八年一月一日に極めて高額な輸入関税が導入されたことに関連して、長崎港への貨物輸送量が増加した問題もいくつかの報告書で検討されています。別の報告書の中でドウバソフは、「将来我々の敵国となる可能性が高い日本は、非常に整備され補給もしつかりした港を有し、急速に増強されつつある海軍の要求水準に対応すべく、港のさらなる拡張と改善が精力的に進められている」と指摘しています。極めて当然のことですが、日本海軍の構成、現状、活動についても種々の報告書で検討されています。他に、外交問題が扱われているものもあり、特に一八九八年九月の報告書では日本の

対フィリピン政策が言及されています。一八九八年一〇月付の報告書の下書きが残されていますが、旅順でフクハラという日本人がスパイ容疑で逮捕され軍事法廷に引き渡されたこと、ドウバソフが恩赦を請願したことが記され、さらにこの日本人は恩赦を受け旅順半島から追放されたことも触れられています。

以上の他に、ドウバソフのフォンドの中に日本の歴史に関する情報が含まれている史料がありますので、いくつか紹介したいと思います。一八九六年から一八九七年にかけてのメモは、函館からサハリンに出漁した日本漁船の活動、一八九六年の漁獲量とその価格、函館からニコラエフスクに出漁した漁船についても同様のことが記されたものです。ロシア公使ローゼン男爵が一八九八年四月付でドウバソフに宛てた手紙は、朝鮮問題に関する日露協定調印についてのものです。また興味深いものとして、一九世紀末の日本における国営および民間の船渠に関するきわめて詳細な情報があります。そして、以上の史料とは性格を異にするものとして、モスクワ大学印刷局から出版された『日本におけるロシア正教』と題する小冊子があります。

さて、一八六〇年から一八六一年にかけてクリッパー艦隊を指揮し中国海域と日本海域を本拠としたイヴァン・フォードロヴィッチ・リハチヨフは多くの研究者の興味をそそる人物ですが、ロシア国立海軍文書館にフォンド16「リハチヨフ・イヴァン・フォードロヴィッチ提督」があります。このフォンドの史料の中に、一八六〇年と一八六一年に元帥コンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公宛てに提出された報告書の写しがあるのですが残されていて、それらから私たちは次のようなことを知ることができます。それはシベリア方面艦隊および東海岸軍港の司令官カザケヴィッチ少将がロシア領事との面会のために箱館を訪問し、サハリンについての情報収集を行い、箱館奉行と会見をしたこと、サハリンに関

しプチャーチン伯爵の使節団以後ロシアと日本の間に確立した友好的関係についての会談、ムラヴィヨフ・アムールスキイと日本政府全權大使との会談とその結果、リハチヨフ提督とインノケンチイ主教との箱館奉行訪問とその会談内容、などですが、この会談内容には、日本帝国全域の海域測量をイギリスに許可したことと日露間でのサハリンの勢力範囲の画定が含まれています。

報告書以外に注目すべき一連の文書がありますが、その中にリハチヨフがコンスタンチン・ニコラエヴィツチ大公に提出した覚え書の控えがあります。これらは、日露関係、日本、サハリンを含めてのこれからの両国関係発展の可能性、江戸と長崎にロシア領事館が開設されたことについてのものです。領事館開設に関する文書は一八五九年のものと推定されます。一八六一年一月二日にリハチヨフ提督は対馬でのロシアの軍事行動、一八五八年からの日露関係、対馬の戦略的意義について元帥宛に短い活動報告を提出していますが、フォンドに残されているのはその下書きです。一八八五年リハチヨフ提督は、皇帝アレクサンドル三世宛てにロシアの極東政策と対馬の戦略的評価を述べた手紙を準備しています。この手紙は宛先人に送付はされませんが、フォンドには下書きが残されています。一九〇四年の初めに皇帝ニコライ二世宛に提出された極東に関する回想録(下書き)はリハチヨフの分析の集大成ともいうべきものです。太平洋沿岸地域におけるロシアの優越的地位の確認と強化について述べられています。その中でリハチヨフは、ロシアと日本、ロシアと朝鮮、朝鮮と日本、それぞれの関係に言及し、対馬港の評価と対馬に対するロシアの関係に関する歴史的事情調査を再度記しています。リハチヨフのフォンドの中には別種のものとして、ルダノフスキイ大尉がサハリン調査に関してプチャーチン伯爵に宛てたメモの写しが残されています。このメモから私たちは、日本の役人の本陣の配置、一八五四

年および一八五七年における日本人居住地、オホーツク海沿岸での日本人による住居建設、ルダノフスキイと日本の役人との会見について知ることができます。また、一八五四年にはサハリンに日本人はいなかったことも記されています。さて、特別な注目に値するのは一八六〇年から一八六一年にかけてのリハチヨフ提督の日記です。フォンドに残されているのは書き手自身による訂正の入ったものの写しですが、この日記から私たちは、リハチヨフの箱館到着が一八六〇年の四月であり、ロシア領事ゴシケヴィツチと面会をしたことを知ることができます。町の様子、日本家屋、寺院、中国を含めた通商、ヨーロッパ人に対する日本人の態度をも相当詳しく記されています。一八六〇年一〇月にリハチヨフは長崎を訪れています。日記を見ると海軍伝習所が閉鎖され生徒は江戸に移されたこと、日本のゴルベツト艦が長崎に寄港したことが書かれています。一〇月三十一日の日記には、長崎の副奉行が部下を連れてリハチヨフ提督を訪問し、長崎の防衛強化のための砲台建設の件で助力を依頼したことが記してあります。日記の書き手は、時に対談相手特に箱館奉行が彼の目にどう映ったかについても言及して、箱館副奉行夫人がロシア領事の娘達を連れて訪問したこと、日本人の外見、服装、履き物、振る舞いなど、様々な社交行事が具体的に書かれています。一八六一年二月と特定できる日記には日本政府の特徴についての簡単な記述が見られ、三月には日本人水先人の特徴についても記してあります。日本の町や沿岸を記述する際、リハチヨフは時に自分がかつて訪問したことのある場所、特にギリシャの群島と比較しています。サハリンも当然リハチヨフの関心の範囲に入っていて、例えば一八六一年の七月の日記を見ると、サハリンの日本人居住数、その職業、在島のロシア歩哨に対し日本人が及ぼす影響力に関する情報が記してあります。画像史料の中で注目すべきは、日本人の手になる墨と鉛筆で描いた日本の帆船の絵、海軍少

尉ゼリョーヌイが撮った箱館の町の写真で、いずれも一八六〇年代のものです。

フォンド24は「ステツエンコ・コンスタンチン・ヴァシリエヴィッチ海軍中将」のものです。ステツエンコは一九〇〇年から一九〇三年にかけて太平洋艦隊司令本部付参謀長、一九〇四年から一九〇五年は太平洋艦隊司令参謀長、一九〇五年から一九〇六年には巡洋艦アスコリド号を指揮し、一九一一年から一九一三年にはシベリア方面艦隊の司令官を務めました。このフォンドには様々な報告書が残されていますが、中でも太平洋艦隊司令官N・M・スクライド中将が一九〇〇年二月四日付で太平洋海軍司令官に宛てた報告書の写しは、ロシア海軍軍人に対する日本の世論および報道の非友好的態度、日本国内の政治的状况とその見通しに関するものです。また、在日ロシア海軍武官A・I・ルーシン大尉の一九〇一年の幾つかの報告書の写しに記されている情報は、日本海軍の一般兵員増強数、特に基地と部署ごとの新兵の配置、今後の海軍増強の必要性を論じた日本の報道資料および第三次戦艦建造計画の作成に関するものです。輸送船レナ号艦長ベルリンスキ―中佐が一九〇四年一月に太平洋艦隊司令官に宛てた報告のひとつには、サンフランシスコにおよそ三万の日本人が居住しているという情報が含まれています。ステチェンコ中将のフォンドの中で見逃せないのは、彼自身の文書と一緒に残されている関東司令長官E・I・アレクセエフ提督が一九〇〇年二月二四日付でステチェンコ中将に宛てた手紙の正本で、アレクセエフは、太活近辺の戦闘で負傷し長崎の軍病院で療養しているロシア兵への配慮に対して、日本政府に深謝の意を伝えるようステチェンコに依頼をしています。

フォンド41「アスランベゴフ・アブラアミイ・ボグダノヴィッチ海軍中将」。アスランベゴフは一八七九年太平洋艦隊司令官に任命され、一

八七九年から一八八二年にかけてクリッパ―艦ナエズドニク号、フリゲート艦クニヤジ・ポジャルスキー号、巡洋艦アジア号およびアフリカ号を指揮し、太平洋各地の港を航行しました。一八八二年には日本の旭日二等勲章を授与されます。このフォンドには様々な艦長の報告書が残されています。一八八一年六月のフリゲート艦ゲルトツォグ・エンジンブルグスキー号艦長報告書には、下田地方の気候・通商、清水での県令との会見および茶の輸出とその量について記されています。巡洋艦アフリカ号艦長E・I・アレクセエフ海軍少佐の一八八一年夏の報告書では、長崎への寄港、長崎港に停泊している外国船、新任のオランダ弁理公使バン・デル・ロットの着任、および天候状況が伝えられています。巡洋艦アジア号艦長F・アモソフ海軍少佐の一八八一年九月の報告書には、岸から四〇マイル離れた沖合で日本の漁船が発見され日本人漁師一名を救助、手当をし横浜の当局に引き渡したことが記されています。クリッパ―艦ストレローク号艦長A・デ・リブロンは一八八二年二月に東京の海軍兵学校を訪問し初年生として教育を受けていた若き皇太子と知り合ったことを報告しています。これとは別に、艦隊司令官アスランベゴフ自身が元帥に宛てた報告書の一部が写しで残されていて、彼が一八八二年六月に東京に行き日本の天皇睦仁に謁見したこと、その際にアスランベゴフが述べた歓迎の辞、神戸に滞在し薬泉として有名な有馬温泉を訪れたこと、および、一八八二年七月にソウルで起こった日本人に対する朝鮮人の敵対行動について知ることができます。なお、ソウルでの出来事についての情報はアスランベゴフが日本の海軍卿から直接得たものであることを付け加えておかなければなりません。

さて、今日ここにお集まりの皆さんにとって最も興味深いのはフォンド240「I・F・リハチヨフ少将指揮下の中国海艦隊」であろうと思います。特に第一の番号の付いたファイルに、リハチヨフの中国海艦隊司令

官任命に関連して元帥コンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公によって出されたリハチヨフ大佐宛の訓令の原本が入っていますので、日本からの研究者の多くが文書館の史料に当たらず最初は一八六〇年一月一七日付のこの訓令から研究に着手することになります。このフォンドの中で注目すべきは長崎奉行が一八六一年一月から二月にイヴァン・フョードロヴィッチ・リハチヨフに宛てた書簡の原本で、日本人志賀をゴシケヴィッチ領事指導下にロシア語を学ばせるために箱館に派遣したと、船の修理のため長崎に入港したロシア海軍軍人に居住用に寺院および民家を賃借する権利が与えられたことが記されています。同じく一八六一年に書かれたと推測される別の書簡がありますが、これはその内容において他とは異なっていて、正確な遠距離射撃のための武器および砲弾の図面を日本側に提供したことが書かれています。また、長崎奉行がゴルベツト艦ボサードニク号艦長ビリレフに宛てた四通の書簡原本が残されています。そのうちの三通ではロシア水兵が船津村に家を借りることの可能性についての問題が扱われていますが、そのうちの一通は暴風雨の際に日本の小船と乗組員を救助したセルコフ大尉を始めとするロシア水兵に謝意を表する目的で出されたものです。日本の奉行の書簡とは別に、ロシア領事ゴシケヴィッチの書簡の原本が二通残されていますが、うち一通はリハチヨフに宛てたもので、江戸の往来で大老が殺害されたことについて、もう一通はビリレフに宛てたもので、医師補G・ゴモミツキーが襲撃された事件の捜査結果について奉行からの通知を受け取ったことを記したものです。これらの書簡類はある程度日本人を含めた研究者にすでに知られているものですが、これに対して艦長の報告書は、一行一行がほとんど皆興味深く、異なった階級の艦長の報告書を含めた各種史料の内容をつきあわせることによって当時の出来事の最も完全な全体図を得ることができます。にもかかわらず、ほとんど研究され

ていない。より正確に言えば、事実上まったく研究されていません。リハチヨフのフォンドにはゴルベツト艦ボサードニク号の艦長A・A・ビリレフ侍従武官が艦隊長リハチヨフ大佐に宛てた一八六〇年七月と一〇月の報告書がありますが、その中では次のようなことが記されています。すなわち、長崎に寄港し奉行を訪問したこと、悟真寺を日本側が軍病院用に提供したこと、日本側当局との連絡に日本の士官田中が任命されたこと、日本の僧侶と周辺住民のロシア人に対する態度、さらに、この地区ではロシア語を話す者が多く、そのうち二名は奉行から通訳として任命されたこと、住民の要請で奉行の了承を得てボサードニク号の司祭を主任とするロシア語学校が寺院の一室に設けられたこと、および生徒の内訳などです。別の報告書の中でビリレフは、ヨーロッパ人と日本人に対する長崎の食料価格と悟真寺の賃借料についての情報が記されています。一八六〇年一〇月にリハチヨフに宛てた報告書の中でビリレフは、日本の士官田中と稲佐の庄屋志賀の日露間の仲介活動と彼らがロシア人に対して非常な好意を寄せていることを伝え、ロシア軍人付きの通訳の諸岡栄之助と平山儀三郎に大小帯刀の権利を褒美として与えることを奉行に請願したこと、そして、彼らはウンコフスキイ侍従武官の提言で、既に一本帯刀を許されていることを記しています。六〇門砲装備のフリゲート艦スヴェトラナ号艦長イヴァン・ブタコフ中佐が一八六一年三月に艦隊司令官に宛てた報告書では、長崎滞在が終わり出港前に奉行が艦を訪問したこと、ロシア水兵に対する奉行の態度、四ヶ月間の停泊中の出来事が伝えられています。クリツパー艦オプリーチニク号艦長セリヴァノフ海軍少佐が一八六一年六月半ばに艦隊司令官宛てに出した報告書では、六月四日の箱館の火事と少尉補カリヤキンを始めとするクリツパー艦乗組員が消火活動に参加したこと、火事の被害、この件で箱館奉行が艦を訪れロシア側の助力に対して謝意を表したことが伝えられています。

同じくセリヴァノフ海軍少佐の一八六一年六月二四日と七月八日付の報告書では、クリッパー艦の医師補ゴモムニツキイ八等官が日本人に襲撃されたことと彼の健康状態、および事件の捜査状況が記されています。

さて、今日の段階で私たちが最も多くの情報を得ることができたのは、フォンド536「太平洋艦隊」です。フォンド自体の量は全体としてそれほど多くはなく、一八六九年から一八八八年にかけてのものが一〇〇点少々含まれているのみです。今日は他のフォンドと同様に、書簡と報告書の二種の史料のみを見ていくことにしますが、すべての書簡について述べることは当然不可能ですので、いくつかのみを選ぶことにします。一八七四年四月一日在日ロシア領事オラロフスキイはアドルフ・イヴァノヴィッチ・ゲルト宛てに、神戸の県令ならびに諸外国領事から港湾医の職を提示されたことを書き送っています。同じ年の一月八日在日ロシア大使K・ストウルヴェは艦隊司令官F・J・プリムメル宛てた書簡の中で、東京の商人キサキ・コキチ所有の船「ヒラク・マル」が遭難した際に救助に当たったロシア水兵に対し、日本国外務卿からの謝意を伝えています。一八七六年九月在日ロシア大使K・ストルヴェはO・P・ブジノ少将宛てに、一八七六年春に日本海軍軍人がウラジオストックに滞在した際に受けた歓迎とともてなしに対する日本国海軍卿川村中將の謝意を伝えています。さわめて興味深いのは、一八七七年一月二十九日に長崎のロシア領事A・E・オラロフスキイが九月の台風で長崎の軍司令部が損壊したことを伝えていることです。残念なことですが、ロシア水兵のあるまいよからぬ点があつたようで、これについては例えば在長崎ロシア領事V・コストイリヨフが一八八〇年二月二日A・B・アスランベゴフ提督に伝えています。このフォンドには、高島炭坑理事会がフリゲート艦ミーニン号艦長N・ナジモフ大佐宛てに石炭の納入と長崎での価格を説明したのも残されています。一八八一年六月付けの書

簡の中には、ロシア士官が旭日勲章を授与されたこと、および叙勲者リストを在日ロシア武官がS・S・レンフスキイ提督に宛てて報告したものの、また、太平洋海軍司令官S・S・レンフスキイがロシア公使K・V・ストルヴェに宛てた書簡では、日本政府関係者のロシア艦隊に対する態度、ロシア水兵の活動に対してあらゆる協力を日本側から受けていることを記し、長崎と横浜の知事と副知事ならびに日本海軍高官にロシアの勲章を授与することを請願しています。長崎のロシア領事館と太平洋艦隊司令官で交わされた往復書簡は志賀氏の提示した条件で稲佐の土地を軍病院用に取得(賃借)することに關するもので、いずれも一八八六年のもので、以上書簡について概観しましたが、最後に紹介する太平洋海軍司令官S・S・レンフスキイが第一艦隊司令官・海軍少将シタケリベルグ男爵に宛てた書簡では、自分の代わりに上京して依頼を遂行してほしい旨伝えたもので、その中には、無期限滞在の条件付きで日本の港への自由な寄港と日本の港でのロシア水兵の療養についての許可を日本側に求めるといふ依頼も含まれています。

このフォンドには報告書が多数ありますが、艦隊司令官から海軍元帥宛てのものと同時に、個々の艦船の艦長から艦隊司令官に宛てたものもあります。一八七五年九月、艦隊司令官は、海軍省長官の指令を遂行し、長崎に浴場、軍病院、艇庫、鍛冶場の建設予定地を期限一〇年で賃借する契約を結んだことを報告しています。一方、同年一月二七日付の報告書から私たちは、艦隊司令官が江戸でロシア公使K・ストウルベと同伴で日本皇帝に謁見をしたことを知ることができます。また、この書簡では儀礼、通された部屋、謁見後のもてなしも記述されています。同じ艦隊司令官の一八七五年一月二八日の報告書では、日本国海軍卿の提案でロシア海軍軍人が海軍兵学校を訪問したことが伝えられ、部屋、生徒の人員配置、校舎の構造、生徒の外見についての簡単な情報、一八

七五年に第一期生が三五人卒業したことが記されています。一八七七年秋、セタン軍管区の沿岸でロシアのスクーナー型軍艦アレウト号が難破した際、日本政府はスクーナー艦乗組員を救援し、函館の知事も個人的に救援を送り、乗組員は全員救助されるということがありましたが、このことはペテルブルグに送付された幾つかの報告書の中で伝えられています。一八七八年五月海軍元帥宛てに、日本国内務卿大久保が車で皇居に行く途中、市内の人気のない所で暗殺されたことが伝えられています。

また一八七九年五月には、横浜でロシア人複数が自己資金で排水量七〇一七トンのスクーナー帆船を注文したことが判明したという、極めて興味をそそる情報が伝えられています。一八八一年二月に長崎で大火が発生し、ロシア水兵も消火活動に当たりましたが、第二艦隊司令官A・アストラベコフ少将は消火活動に当たった士官を日本の叙勲に推挙し、そのことは所定の形式でペテルブルグに伝えられました。クリツパー艦ストレローク号A・デ・リブロン海軍少佐の報告書では、一八八一年の長崎でコレラが発生したこと、一八八二年の初めに日本海軍司令部の許可を得て横須賀の官営工場で修理を行ったこと、まだ外国人に開かれていない港で、しかも艦長が選んだ場所に対する訪問許可状が日本政府から下りたことが記されています。一八八二年二月にはデ・リブロン艦長は、フリゲート艦ディアナ号が大破しスクーナー艦ヘダ号が建造された場所を士官たちに見せるために下田と戸田に寄港したこと、さらに戸田の住民のロシア人に対する態度を伝えています。一八八五年五月一〇日クリツパー艦オブリチニク号艦長F・ゲッセン海軍中佐はその報告書の中で、神戸への寄港、一八七八年に置かれた帝国海軍司令部、機械工場および造船所、商船の建造数、最初の戦艦であるゴルベツト艦大和艦が一八八五年四月一九日に進水したことを伝えています。最後になりましたが、一八八六年八月の艦隊司令官報告書では、長崎で中国人水夫と日本の警

察が衝突し、数百人が武器を手に乱闘となったこと、さらに事件の犠牲者数がかなり詳しく書かれてあります。

本日はロシア国立海軍文書館のほんのいくつかのフォンドを皆様にご紹介しました。簡単な紹介ではありましたが、私たちの文書館のフォンドには二〇〇年にわたる日露関係に関する膨大な史料が蓄積されていることがお分かりになったことと思います。このテーマについての全史料を私たちが把握できたことと確信を持って言うことができるには最低でもあと二、三年は必要です。今日はロシア海軍の司令官の報告書に重点を置くことに努めてお話ししましたが、私が挙げた例からだけでも、尊敬する同学の皆さんがこの史料が注ぎ深い詳細な研究を必要とすることを実感していただけるものと期待しています。なぜならば、この史料は重要かつ興味深い情報を含んでいて、日露関係の状況と日本の歴史を新しい観点から詳細に考察する可能性を与えてくれるものだからです。同時にこれらの文書は、ロシア海軍士官が良き訓練教育を受けていたかということ、彼らが海軍、陸軍、軍事教育および軍事産業に関係する問題のみならず、その地域の外交および内政、経済状況、通商、農業などの問題に関しても詳細な知識を持っていたことを示しています。私たちの考えでは、日本の歴史と日露関係に関する史料を明らかにしその目録を作成する事は、きわめて将来性に満ちており、その集大成として、フォンドの概観あるいは史料集の形が考えられます。そしてこれにより、ロシア国立海軍文書館と東京大学史料編纂所、および日本の他の文書施設を含め、双方の史料を統合することもできるのではないかと思います。しかし、これは、私たちの文書館のフォンドの大部分についての目録作成が完了した後で、初めて現実的なものとなるでしょう。今は私たちの共通の仕事の成功をお互いに祈るにしたいと思います。

(翻訳：有泉和子)